

特集後記

恒川邦夫教授が一橋を退官なさって一年になる。今号の特集は図らずも氏の退官記念の色彩を加えたが、そのことが単に記念であるのではなく、ひとりの偉大な導き手にふうわり軽やかに去られてしまった言語社会研究科の柔弱なノスタルジーによるものでもなく、「周辺と中心はひとつのダイナミックな関係を構成する二つの要素であって、固定的なものではない」という氏の言語・社会への根本的な視線の向きを、この紀要『言語社会』が何らかの形で確かに受け継いでゆけるといい、そう願う意思のあらわれであれたらと思う。

この紀要には、判型の違う『Ren』という名の「別冊」がつく予定になっている。これは教員がいっさい手を加えず、学生たちがみずから方針を定め編集してつくるものだ。言社研は将来研究者をめざす学生ばかりで構成されてはいない。修士課程を出て就職してゆく、あるいは博士課程にいながらにして「論文執筆」とはまた異なる営みにおいて社会に関わろうとする、

そうした人たちの営みの総体から生まれる種々の書きものうち、「アカデミック」な査読つき紀要の場からこぼれ落ちる多くを『Ren』がおそらく拾いあげるのだろう。「周辺と中心は固定的なものではない」——そういうテーゼを、しかしこの「二冊組」が体现するとよいなどと必ずしも願っているわけではない。端的にあくまでもばらばらな二冊が一組なのであり、唯一、両方のデザインを一人のデザイナーが引き受けてくれているという点のみが（少なくとも今年度は）二冊をkarouうじて繋いでいる。

『言語社会』今号の見返しが濃紺色なのも、『Ren』の浸出によるものだ。『Ren』の表紙が青いらしいというので、純粹にデザインコンセプト上それに侵蝕されて『言語社会』もいくぶんか青いのである。つまりはたまたま青くなつたにすぎないのだが、その偶然を無条件に受け入れたとき、『言語社会』においてその青は、人と言語にまつわる世の営みの渦巻く潮の青になった。

（紀要編集委員 武村）

